

ZOOM発信・伝承文学あれこれ (27)・カラス カラス どこ行った

2022年11月14日 (月) 20:00~21:00

酒井 ただよし 董美

カラス カラス どこ行った 子守り歌 隠岐郡海士町御波

歌い手 徳山 千代子さん (明治37年生)



カラス カラス
どこ行った
わしゃ京へ麦刈りに
なんばほど刈ってきた
千石 万石 刈ってきた
仏の前で子を生んで
洗うこともできず
すすぐこともできず
お寺の茶柄杓で
ちやびしゃく
ちょちよつとすすいで
油の火であぶった
ねんねんや ねんねんや



収録日 昭和60年 (1985) 8月 (日付不明)

(イラスト・福本隆男)

解説

これはまた変わった子守歌である。うかがったのは昭和30年の夏、島根県教育委員会が全県下で行った民謡調査のおりのことであった。筆者もこのとき、現地の郷土史家の淀重美氏と一緒して徳山さんをお訪ねし、うたっていた歌の一つであった。

実は、筆者は昭和48年から5年間、現地の海士中学校や隠岐島前高校に勤めており、高校では郷土部を再興したが、そのおり部員の生徒たちと共によくこの徳山千代さんをお訪ねして、何度もたくさんの民話やわらべ歌をうかがっていた。しかし、そのおりにはこの子守歌については、教えていただいていたものであった。

それはそれとして、この歌はなかなかおもしろい。

カラスに「どこ行った」と呼びかけ、「わしゃ京へ麦刈りに」以下は、カラスがこの呼びかけに対して答えた形で進んでいる。内容は荒唐無稽^{こうとうむけい}ではあるが、おさな子をあやすのにはもってこいの物語を持っているとは言えないだろうか。

ところで、鳥取県で捜してみると、例えば次のような、これまたまったく意味の通らないナンセンスな内容を持った、けれどもどことなく楽しい歌が、東部地方で見つかった。

夕べ生まれた坊主子が
納戸の唐紙開けて出て
じいさん ばあさん
泣かしゃんな
われが十五になったら
この山崩いて堂建てて
堂のぐるりにゴマ撒いて
ゴマは仏の嫌いもの
油は仏のおみ明かし
おみ明かし
堂のぐるりに松植えて
松の梢に鈴つけて
鈴がチャンチャン
鳴るときは
じいさん ばあさん
うれしかろう

(福部村出身 浜戸こよさん・明治39年生)

これもまた物語風といえる。わらべ歌の中には、こうして節のついた民話とでもいうべきものがよくある。

以前のおさな子たちは、このような歌を、絶えず聞かされていた。しかし、二十二世紀を迎えた今日では、まず、歌そのものを知っている者がいないといってよい。

祖父母などから、このような子守歌を聞かされて育った子どもたちは、おそらく豊かな感受性を備えて成長してゆくのだがと、ふと思ってしまうこのごろである。